

2019年 6月 22日

北九州市教育長
田島裕美 殿

一般社団法人 DOCOMOMO Japan
代表理事 渡邊研司



旧八幡市民会館の改修に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

本会は、20世紀の建築と環境遺産の価値を認め、その保存活用を提唱することを目的の一つとする国際的な学術団体 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement=モダン・ムーブメント) に関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織) の日本支部です。

貴市におかれましては、北九州市八幡東区尾倉2丁目6-5に位置いたします旧八幡市民会館の建物について、建物を埋蔵文化財センターおよびその収蔵庫に転用する改修を計画しておられること、北九州市の発表や新聞等の報道により聞き及んでおります。

旧八幡市民会館は、旧八幡市(現・北九州市)の戦後復興事業と八幡市制40周年を記念して1958年(昭和33)年に竣工したもので、設計者は少年から青年時代を八幡で過ごし、後に文化勲章を受章した日本を代表する建築家、村野藤吾(1891-1984)です。その建物は下記に記したとおり、戦後の日本における歴史的建築として高い価値を持っています。

DOCOMOMO Japanでは、2017年2月8日に貴市市長宛に「八幡市民会館の保存活用に関する要望書」を提出しましたが、その後、この建物の保存活用が決断されたこと、非常に喜ばしく、関係者の皆様には感謝申し上げます。

しかしながら、その後の北九州市の発表や新聞等の報道によりますと、転用のための改修は、既存の建物の歴史的価値を損ねるような形で進められているように見受けられます。こうした建物は、機能に応じた整備や構造体の補強によって長寿命化を図り活用していくことが、建築資源の有効活用の観点からも求められておりますが、その際、オリジナルの建物の価値を損ねないような細心の注意を払った改修デザインが必要になります。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該建物の歴史的な価値を保つための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げます。

なお DOCOMOMO Japan は、この建物の改修に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

旧八幡市民会館の建物の概要や建物の歴史的、デザインの価値、改修のあり方を以下に記載いたします。

1) 建築の概要

福岡県北九州市八幡東区尾倉 2 丁目 6 -5 に位置する旧八幡市民会館は、1958 年に竣工しています。設計者は村野・森建築事務所（村野藤吾）、設計監理は八幡市建築部建築課、施工は清水建設です。建物は、竣工当時 1750 席（後に約 1450 席に改修された）を備えるホールからなる「市民会館」と、その西側に接続する南北に細長い建物「美術工芸館」の、異なる名称の 2 つの施設の複合として建設されました。「市民会館」は地下 1 階、地上 4 階建ての鉄骨鉄筋コンクリート造、「美術工芸館」は地下 1 階、地上 1 階建ての鉄筋コンクリート造です。「市民会館」と「美術工芸館」を合わせた竣工当時の敷地面積は 9,810 m²、延床面積は約 5,520 m²となります。以下、旧称の「市民会館」と「美術工芸館」を合わせて「八幡市民会館」と呼ぶことにします。

旧八幡市民会館は、建設から 60 年近くが経過しています。その間に、設備系を中心に幾度かにわたって改修が行われたようですが、よくメンテナンスが行われ、外観からインテリア、家具にいたるまで、全体として竣工当時の姿をよく残しています。また建設から 50 年以上が経っており、歴史的な価値も有しています。

旧八幡市民会館は、日本における最初期の市民会館の建物です。建設当初より建築作品として高い評価を受けており、1960 年には、建築主と設計者と施工者の三者による理解と協力に基づいた優れた設計および性能を持つ建物に対して贈られる第 1 回 BCS 賞を受賞しています。またその後、日本建築学会が編纂し全国の重要な建築を選定し地域ごとにまとめた書籍『総覧日本の建築 9 九州・沖縄』（新建築社、1988 年）に掲載されています。これは、日本建築学会が日本の建築文化にとって重要な建築として認定したことを意味しています。そして 2015 年には本会が、日本を代表する優れたモダニズム建築として、旧八幡市民会館を選定しております。

旧八幡市民会館の設計図面資料については、村野藤吾によって作成されたものが、京都工芸繊維大学美術工芸資料館に約 100 枚収蔵されています。2005 年に同館で開催された第 7 回村野藤吾建築設計図展では、その一部が展示され、『村野藤吾建築設計図展カタログ 7』（京都工芸繊維大学美術工芸資料館発行）にも記録されています。また 2015 年には、東京の目黒区美術館で開催され 1 万数千人もの入場者を得た「村野藤吾の建築—模型が語る豊饒な世界—」展でも、これらの資料が展示されていました。このことは、旧八幡市民会館の建物の歴史的、文化的価値が近年、高い評価を受け、全国的に認識されつつあることを意味しています。

2) 建築史上の価値

2-1) デザイン的価値

旧八幡市民会館は、中央部の茶色い壁面の大きな建物と、その西側に建つ南北に細長い建物との組み合わせからなっています。装飾を排除し合理性や機能性を追求した、いわゆるモダニズムの方法によるデザインです。そこには時代の課題に答えたデザインと村野ならではの個性に満ちたデザインの両者が見られるのが特徴です。

建物は、1955年に移設されて開業した現在のJR八幡駅とその南に聳える皿倉山を一直線に結ぶ駅前大通りの南端部に建っています。建物の前面には大きな広場を備え（長く駐車場として使われていた）、その広場から建物の主玄関がある地下1階に容易にアクセスできるように設計されています。またその広場からスロープでホールに直結する建物の1階にアクセスできるようにもなっており、建物と広場とが一体的にデザインされていることに大きな特徴があります。

これは、この当時の庁舎や市民会館など公共建築によく見られる形式で、市民が建物にアクセスしやすい、「開かれた」建物となっていると言えます。戦後の民主主義体制下の公共建築に特有のものであり、この時代ならではのデザインだと言えます。

一方で、設計者の村野藤吾独自のデザインも見られます。建物はモダニズムの方法に基づいた、装飾を持たない抽象的な形態でデザインされています。そして、ホール部分は宙に浮いたように見え、壁面は風船のようにふくらと膨らみ、屋上には薄い屋根が載るといふ、重力を感じさせない軽快でモダンなデザインに特徴があります。

ところが同時に、建物は全体に線対称の構成を持ち、ホール最上部は大きく軽快な屋根で覆われています。その下には八幡製鉄所の鉄を想起させる茶色いタイルで覆われた重々しく見えるホールの建物があり、最下部には列柱が並ぶ地下1階部分がしっかりとした「基壇」があるという、三層構成からなっています。線対称と三層構成は、ヨーロッパのギリシア神殿以来の伝統的な様式建築に見られる特徴で、近代のモダニズムが批判し乗り越えようとしたシンボリックなデザインです。また建物の内部には、凝った階段の手摺やピアノの鍵盤をモチーフとした装飾的なレリーフも設置されています。

すなわちこの建物には、モダニズム建築の抽象的で軽快で「開かれた」建築としての特徴と、モダニズムが批判し乗り越えようとした対象である伝統的な様式建築特有の重厚でシンボリックかつ装飾的という特徴の、相反する2つの特徴が共存しているわけです。こうした両義的なデザインは、村野藤吾に特有のものであり、機能主義や合理主義だけで測ることのできない豊かなデザインだと言えます。

2-2) 村野藤吾の作品としての価値

旧八幡市民会館の設計者である村野藤吾は、現在の北九州市と縁の深い建築家です。村

野は 1891 年に佐賀県に生まれましたが、少年期から青年期までを現在の北九州市で過ごしました。1910 年に小倉工業学校（現・小倉工業高校）を卒業後、八幡製鉄所に勤務しています。その後は陸軍を経て早稲田大学に入学しました。1918 年に早稲田大学建築学科を卒業後、渡辺節が主宰する大阪の渡辺建築事務所に入所し、それ以来大阪を拠点としました。

1929 年には渡辺建築事務所を退所して大阪に村野建築事務所を開設し（1949 年に村野・森建築事務所に改称）、商業施設やオフィスビル、住宅、学校施設、美術館など、全国各地で数々の建築の設計を手掛けています。その建築作品は日本建築学会賞や日本芸術院賞、BCS 賞などを受賞しています。また村野は、1955 年には日本芸術院会員となり、1967 年には文化勲章を受章するなど、日本を代表する建築家としてよく知られています。日本建築家協会会長、イギリス王立建築学会名誉会員、アメリカ建築家協会名誉会員としても活躍しました。

村野が設計した建築は、国の文化財に指定されているものが多いのも特徴です。2005 年には宇部市渡辺翁記念会館（1937 年竣工）、2006 年には広島世界平和記念聖堂（1953 年竣工）、2009 年には村野が増築部分の設計を担当した東京の高島屋東京店（1952・54・63・65 年竣工増築）が、それぞれ国の重要文化財に指定されました。また 2009 年には、村野が修復および改修設計を担当した迎賓館本館（旧赤坂離宮／1909 年竣工／1974 年修復改修）が、近代の建物として初めて国宝に指定されています。同時代の建築家としては、最も数多くの建築作品が重要文化財などに指定されています。このように、近年村野藤吾の建築作品は、文化財としての価値が高く評価されています。

一般に村野は、商業施設やオフィスビルなど、いわゆる民間の建築の設計を数多く手掛けた建築家として知られています。しかし、戦後を中心に、村野の建築作品の全体の中では比較的少ないものの、市庁舎や市民会館など複数の公共建築の設計を担当しています。旧八幡市民会館以外の代表的なものとしては、八幡市立図書館（1955 年／解体済み）、米子市公会堂（1958 年）、小倉市立中央公民館（1959 年／解体済み）、横浜市庁舎（1959 年）、尼崎市庁舎（1962 年）、愛知県森林公園センター（1965 年／解体済み）、宝塚市庁舎（1980 年）など、地方都市の重要な公共施設が挙げられます。

その中でも旧八幡市民会館は、当時の八幡市長守田道隆の主導により実現したのですが、村野が設計を担当することになったのは、「御地（注：八幡市のこと）出身の故をもちまして市長より設計の御下命をうけ」たからです（『八幡市民会館 八幡市美術工芸館 落成記念』（竣工記念パンフレット）、1958 年 10 月 18 日）。村野がかつて居住していた街という強い縁や、当時の市長による八幡市の戦後復興と都市計画を実現する形で建設された建物であり、村野としても思い入れの深い建物だったと考えられます。

このように旧八幡市民会館は、設計者の村野藤吾の建築作品として比較的数少ない公共建築の 1 つであり、また八幡市との深い縁の中で実現した、希少性の高い建物です。また、そのデザインは、1950 年代の村野ならではの、軽快なモダニズムの方法に基づきながらも、様式建築のような特徴をも備えたものとなっているのです。

2-3) 北九州の街から見た価値

現在の北九州市には、村野藤吾が設計した建築作品が複数建てられ、そのいくつかが現存しています。

戦後建設されたものとしては、旧八幡市民会館のほか、八幡市立図書館（1955年／解体済み）や小倉市立中央公民館（1959年／解体済み）、八幡信用金庫本店（現・福岡ひびき信用金庫本店／1971年）があります。また戦前には、八幡製鉄所（現・日鉄住金ロールズほか）の3つの建物が村野の設計により建てられたことが判明していますが、そのうちの1つロール旋削工場（現・ロール加工工場／1941年）は、2016年の末に初めて現存が確認され、新聞紙上で大きな話題となりました（『朝日新聞』2017年1月9日朝刊）。

したがって現在、北九州市には3つの村野作品が現存しています。東京や村野が拠点とした関西以外の地方都市で、これほど複数の村野の作品が集中して建てられ、現存している街は数少ないと言えます。それは、村野が八幡で少年期を過ごしていたことや、八幡製鉄所に勤務していたことなど、村野が北九州市と縁が深いためですが、いずれも北九州市の街の歴史にとって重要かつ象徴的な建物です。

北九州市は、近代に入り、八幡製鉄所の設立によって急速に発展した街です。八幡製鉄所は、現在の北九州市の歴史と繁栄ぶりを物語る象徴的な施設ですが、その建築物の設計を村野が担っていたわけです。また八幡市立図書館や旧八幡市民会館は、戦後の八幡製鉄所の繁栄を背景として、守田市長が主導した戦後復興の象徴として建設された建物です。いずれも、近代における八幡市や北九州市の繁栄と歴史を物語る建物であり、北九州市にとって極めて重要なものです。そして戦前と戦後のこれら3つの建物が合わせて現存していることに、高い価値があります。

その中でも旧八幡市民会館は、守田市長が戦後復興として主導した八幡駅前の整備地区の最も象徴的な位置に建っています。都市景観という観点から見ても、戦後の北九州市の歴史を物語る重要な建物だと言えます。

3) 改修のあり方

前述のように、旧八幡市民会館は、同時代に特有のデザインを持ち、また設計者の村野藤吾ならではのデザインが見られます。そして竣工後50年以上経っています。高い歴史的かつ文化的な価値を有する建物だと言えます。このような優れた建物が失われるようなことがあっては、北九州市のみならず、我国の建築文化にとっても大きな損失です。

旧八幡市民会館のような鉄筋コンクリート造の建物は、修復や改修、補強などを行いながら活用し使い続けるのが、近年の世界的な潮流となっています。世界遺産の登録などを行うユネスコ（UNESCO）の諮問機関であるイコモス（ICOMOS）は、2011年6月に「マ

ドリッド・ドキュメント」を採択しましたが、その中で、鉄筋コンクリート造の建築を中心とした 20 世紀の歴史的・文化財的建築について、「リビング・ヘリテージ」という概念を提示し、積極的に活用し使い続けていくことによる建物の保存を提言しています。

こうしたことを背景として、近年では、優れた改修により、使い続けられている近代建築が増えています。旧八幡市民会館と同様、村野の設計によるホール建築を改修しながら使い続けているものとして、宇部市渡辺翁記念会館（1937 年）と米子市公会堂（1958 年）が挙げられます。

宇部市渡辺翁記念会館は、1999 年に DOCOMOMO Japan が日本を代表する優れたモダニズム建築として選定した後、2005 年には村野藤吾の建築作品として初めて国の重要文化財に指定されたものです。1990 年代に大規模な改修が行われましたが、歴史的価値を損ねないように慎重に行われ、現在も美しい姿を留め、市民から親しまれ、宇部市の街のシンボルのような存在として、現在もよく利用されています。

米子市公会堂は、旧八幡市民会館と同じ年に竣工した建物です。そして旧八幡市民会館と同様、公会堂の建設が長年の念願で、米子の市民の募金活動などが実ってようやく実現した建物です。2009 年に建物の耐震性が低いことが判明しましたが、存続を求める市民の声もあり、大規模な耐震改修が行われ、2014 年に竣工しました。耐震性向上のために屋根を中心に大きく改修したものの、オリジナルの姿がしっかりと守られており、今も竣工当時のままの姿で建っています。やはり市民から親しまれ、現在もよく利用されています。

このように、建物の歴史的、文化的価値を損ねないように耐震性や機能性を改善しながら保存活用されている事例は、村野藤吾の建築作品に限らず、近年、全国各地で増えています。その改修は、建物の外部や内部にわたってオリジナルの姿を尊重し、オリジナルの価値を損ねないようなものであることが求められます。

旧八幡市民会館は、とりわけ村野との縁の深い街に建つ建物です。しかも竣工当時の機能を大きく損なうことなく、つい最近まで使い続けられ、高い歴史的文化的価値を維持しています。今後も、建物が持つ歴史的、文化的価値を保存・維持しながら、機能性や耐震性を高め、活用されることが望ましいと言えます。そしてそれには、デザインのまたは技術的な価値を守る工夫が必要です。多角的なご検討と叡慮により、当該建物の歴史的な価値に十分配慮した改修を行っていただきますよう、切望いたします。